

会話における発話の重なりについて

劉 佳珺

キーワード 会話、重なり、*turn*、*turn-taking*、言語行動

1. はじめに

会話の進行において、例1、例2のように二人の話者の話が重なることがある。

例1：

→1SS：[どこで来てんだろな水が

→2KS：[えっと嗽も

3SS：うん

4KS：嗽もきつい [ですよね。だからベベッとずっとやってて

(→：注目するところ)

例2：

1SS：すぐ、すぐなれる？ [そのにおい

→2KS： [うん：ど [うなるか

→3NY： [日本もありますよ

4SS：ええ↑

5NY：日本に、なんか空港おりたら…

例1は発話の冒頭部の重なりである。1行目SSと2行目KSの発話が重なっていることによって、KSの発話は中断されている。SSの話が終了した後、KSは中断された話を繰り返して発話を再開している。例2は発話の途中部の重なりである。SSが発話を産出する途中でKSは発話に割り込んで、二人の発話が重なっている(2行目)。KSが発話を構築する途中で、もう一人の話者NYに割り込まれて(3行)、発話権(*turn*)を取られている。例1と例2のように、重なりが現れたあと、話者間の発話を調整する行動によって、会話の展開も異なっている。

本研究では以上のような発話の重なりに焦点を当て、重なりが現れた位置と重なりの時点における会話参加者の言語行動を分析することによって、重なり

の特徴を考察する。また、重なりの後の会話の展開における話者交替 (turn-taking) の実態を考察する。

2. 先行研究

Sacks, Schegloff & Jefferson (以下はSSJ) (1974) はturnを「話す義務と権利の部分として割り当てられ、会話の構成のもっとも基本的な単位である」と定義している。そして、話者交替 (turn-taking) のルールを次のように提示している¹⁾。

- 1) すべてのturnにおいて、最初のturn構成単位の最初の「TRP」(turnが移行する可能性がある場所: transition relevance place)において、
 - A 現在turnを持っている話し手が次の話し手を選ぶ場合には、選ばれた次の話し手だけがturnを取る権利と義務を持つ；
 - B 現在turnを持っている話し手が次の話し手を選ばない場合には、その話し手以外の会話参加者全員が自分から次の話のturnを取る権利をもち、そのうち、最初に話し始めた人がturnを持つ権利がある；
 - C 現在turnを持っている話し手が次の話し手を選ばず、かつ次のturnを取る人がいない場合、現在turnを持っている話し手がturnを持続することができる。
- 2) 最初のturn構成単位の最初のTRPで、(1A)も(1B)も適用されず、(1C)の条件のもとで現在の話者が話し続けた場合、次のTRPにおいて(1A) - (1C)が再び適用され、話者の交替が起こるまで反復される。

発話の重なりの位置について、藤井 (1995)、木暮 (2002) は発話の重なりを「同時開始型 (発話の頭と頭との重なり)」、「終了見なし型 (先行発話の末尾との重なり)」、「割り込み型 (先行発話途中での重なり)」に分類している。しかし、どこまで発話の末尾か、どこまで発話の途中かについては具体的に言及していない。発話の重なりの性質について、生駒 (1996) は「偶発的」「予測的」「無意識的」に分類しているが、なぜ前話者と次話者の発話が同時に開始するのか、いかにして次話者が前話者の発話を終了したと見なすのかについてはあまり論じていない。

発話の重なりが会話の展開において果たす役割についての研究は藤井・大塚 (1994)、町田 (2002) などがある。藤井・大塚 (1994) は、発話の重なりは会話の参加者の同意や共感、関心、理解を表し、協力して会話を盛り上げるという役割を果たしていると述べている。町田 (2002) は、「初対面の会話におけ

る発話の重なりは話題となっていることが自分にとっても身近であることをすばやく相手に伝える手段として用いられ、それにより、知識の共有性を確認し、共感を深める機能を持っている」と述べている。以上の研究から、発話の重なりが会話の展開に積極的な役割を果たしていることは明らかとなっているが、発話の重なりが現れた後で、会話参加者がいかにして各自の言語行動を調整するかについては分析する必要がある。

3. データ

分析対象とするものは4人での会話である。会話参加者はすべて日本語母語話者であり、普段から面識がある関係である。男性（SS）1人、女性（KS、NA、NY）3人である。「海外でカルチャーショックからあなたが最も感じられる日本の文化とは何か」というトピックを会話参加者に与え、それぞれの意見と感想を話してもらった。会話参加者全員の許可を得たうえで、ICレコーダーで録音し、総収録時間は25分38秒である。

なお、本研究で使用されたトランスクリプトは、好井・山田・西阪（1999）を参考にして、以下のように表示する。

?	語尾の音が上がっていることを示す
。	語尾の音が下がって区切りがついたことを示す
[会話参加者の発話の重なりが始まりを示す
-	直前の言葉が不完全なまま途切れていることを示す
言葉	当該個所の音が大きいことを示す
↑	音調が極端に上がっていることを示す
↓	音調が極端に下がっていることを示す
(.)	ごく短い間合いで沈黙していることを示す
(m. n)	数字 (n) の秒数で沈黙していることを示す
.hh	吸気音
。。	これで囲まれた箇所の音が小さいことを示す
言葉：	直前の音が延ばされていることを示す
hhh,heh,huh	笑い
言 (h) 葉 (h)	笑いながら話すときのように語の中に呼気が含まれる場合
><	話すスピードが急に速くなる部分
<>	話すスピードが急に遅くなる部分

4. 研究課題

先行研究の問題点を踏まえ、本研究では次の研究課題を設定する。

- (1) 重なりの位置によって重なりを分類する。
- (2) 重なりの時点において、会話参加者の言語行動を分析し、重なりが形成された要因を考察する。また、日本語会話におけるTRP（移行適切箇所）が次話者によってどのように認識されるのかを検討する。
- (3) 重なりの後の会話の展開における話者交替の構造を分析する。

以下の第5章と第6章はデータを分析するものである。第5章では発話の重なりの位置、話者の言語行動及び先行発話の形式を分析し、各々の重なりが生じた要因を考察する。第6章では発話の重なりの後の会話の展開において各会話参加者の言語行動を考察する。

5. 重なりの位置と性質の分析

本章では発話の重なりが現れた位置と話者の言語行動及び先行発話の形式から重なりの特徴を考察する。

5.1 発話の重なりの位置

本研究では、重なりが現れた時点において、先行発話の意味はどのぐらい産出されているかによって、重なりの位置を「先行発話の意味が明瞭になっていない部分での重なり」と「先行発話の意味が明瞭になっている部分での重なり」と分類する。

先行発話の意味が明瞭になっていない部分での重なり

例3:

1SS: テーブルマナーじゃないの? 悪いマナー＝

→2KS: =マナー、マナーってなんか [魚とか [え↑って

→3NY: [なんか魚の骨をそのまま(.) あのう

テーブルクロスに載せるんですよ

1行目ではSSが「テーブルマナー」について質問している。KSはそれを受けて2行目で答え始めている。KSの発話が産出される途中でNYは発話を割り込んで(3行目)二人の発話が一部重なっている。このように、NYがKSの発話に割り込んでいる時点において、KSの発話(「マナー、マナーってなんか」)

で表す意味がまだ明瞭になっていないのである。それにもかかわらず、NYが発話に割り込んでいる。その結果、KSとNYとの発話の重なりが生じたのである。

先行発話の意味が明瞭になっている部分での重なり

例4：

→1SS：え空港降りたら、匂いという、中国もあるの？ [その匂い

→2NY： [あるあるある、ありますよね

1行目でSSは「空港降りたら、匂いという、中国もあるの」と質問している。2行目NYが割り込んだ時点で、SSの発話（「空港降りたら、匂いという、中国もあるの」）は意味の完結性が高く、つまりSSが言いたい意味がすでに明瞭になっているのである。そこでNYが発話に割り込んだ結果、重なりが生じたのである。

このように、重なりが現れた時点において先行発話の意味が明瞭になっているかどうかによって、次話者が前話者の発話をどれくらい受け止め、また、前話者の発話に対してどのように反応するのが示されている。このことについて、次の5.2の「話者交替をする際の重なり」、5.3の「発話が重なる際の話者の言語行動」及び5.4の「重なり時点における先行発話の形式」で詳しく分析する。

5.2 話者交替をする際の重なり

次にSSJ (1974) の「話者交替のルール」に従い、重なりが生じた要因を分析する。

自己選択によるturnの奪取

例5：

1NA：なんかえっこれは水？か↓みたいな

2NY：うん

3NA：災害にあってるか [もうなんか

4KS： [huhhuhhh

5NA：シャワー浴びてるのに

→6SS：[[どこで来てんだろうな水が

→7KS：[[えっと嗽も

8KS：嗽もきつい [ですよね。

1行目、3行目と5行目でNAは水について話している。5行目のNAの発話が終わった後で、SSとKSは同時に話し始め、二人の発話が重なっている（6

行目と7行目)。SSJ (1974) の話者交替のシステムでは、「現在turnをもって
いる話し手が次の話し手を選ばない場合には、その話し手以外の会話参加者全
員が自分から次の話のturnをとる権利をもち、そのうち、最初に話し始めた人
がturnを持つ権利がある」と述べられている。このことに従い、5行目NAの
発話が終わったと判断された場合、だれがturnを取って話をするのかは次の話
者自身の判断で、つまり、自己選択することによってturnを取ることである。
そのため、SSとKSは次話者になるために自己選択を行い、turnを取ろうとする
場合(6行目と7行目)で、二人が同時に発話し、重なりが生じたと考えられ
る。

先行話者の発話の継続と次話者の自己選択とのずれ

例6:

1KS: もう本当に生の魚っ [て食べられないので、もうすっごく食べたく
なっちゃって、生の<魚とか>

2NY: [. huhhuh

→3KS: [寿司

→4SS: [あ、生魚とか食べられないんだ

5KS: 食べられなくもう今はないんですけど↓まあおいしくないし

1行目でKSは「生の魚って食べられないので、すごく食べたくなっちゃっ
て」という発話を構築している。発話の終了部(「生の魚とか」)でスピードを
落とし、その後3行目でKSは「寿司」と自分の話を続ける際に、4行目のSS
の「あ、生魚とか食べられないんだ」という確認的な発話と重なっている。

例6のように、1行目でKSは発話(「もう本当に生の魚って食べられないの
で、もうすっごく食べたくなっちゃって、生の魚とか」)を構築する際に、明
確な終止形を使っていないため、次話者SSにとってはKSの発話が意味の完結
をもち、すでに終了したと判断し、KSの話すスピードが落ちているところで
話し始めている。それによって二人の発話が重なっている。つまり、前話者
KSが自分の話を続けようと、次話者SSが自己選択をしてturnを取ろうとする
という話者間の判断のずれによって、発話の重なりが生じたと考えられる。

5.3 発話が重なる際の話者の言語行動の分析

本節では発話の重なるの時点における話者の言語行動を分析することによ
り、重なりが生じた要因を考察する。

先行話者への助け船

例7:

→1KS: でやっぱりあのいろいろな(.)あのいろいろなその国の味とかもう

(.) その、ためすんですけど、やっぱり落ち着くところは(.) [日本
→2SS : [日本
食

3KS : 日本食だなあっていう：感じで

1行目でKSは発話を構築する途中でマイクロポーズを置き、後ろの発話を考えている。それに対し、2行目でSSはKSの発話の意味に基づき、時間を埋めるために、「日本食」というヒントをKSに示し、先行話者KSへの助け船を送っている。ここでKSが発話を再開しようとして、SSの発話と重なっている。このように、SSはKSへの助け船を送った結果として、重なりが生じており、その後に発話権をKSに返したのである。

先行発話への補足

例8 :

→1NY : 犬(.)を食べる(.)国ってそんなにない [ですね

→2KS : [韓国と中国 [ぐらい

→3NY : [韓国と中国ぐ

らいですよ

4KS : って言いますよね

1行目でNYは「犬を食べる国ってそんなにないですね」という意見を述べている。それに対し、KSはNYの意見を補足するために、NYの発話の途中で「韓国と中国ぐらい」と割り込んでいる。KSからの補足を受けて、3行目NYは2行目KSの発話の途中でまた割り込んで「韓国と中国ぐらいですよ」とKSに確認している。このように、KSはNYの発話を補足するために割り込んで、重なりが生じた。その後、KSの発話が進行する途中で、NYがKSからの補足を受け止め、さらにKSの発話に割り込んで、確認する際に発話の重なりが再び生じたのである。

新たな展開

例9 :

1NY : でも日本：ぐらいじゃないですかね。なんか和洋：

2SS : うん

3KS : うん

→4NY : 中って [そろってるのって

→5KS : [でも本当にそうは—なんか日本が一番<自分が日本人だから
分からないですけど、一番料理がおいしいと思いました。

NYは1行目と4行目で「日本ぐらいじゃないですか。なんか和洋中ってそろってるのって」という意見を構築している。その発話が産出された順序は

「結果（日本ぐらいじゃないですか）～理由（和洋中ってそろってるの）」と
なっている。KSはNYの「日本ぐらいじゃないですかね」という結果、「なん
か和洋中」という理由などの発話によって、NYの発話の意味を推測し、5行
目でNYの発話に割り込んで「でも本当に…」と自分の反対意見を述べ始めて
いる。このように、KSは自分の発話を優先させ、新たな展開を導き出そうと
しているために、NYの発話に割り込み、NYとの発話の重なりが生じたのであ
る。

以上のように、発話が重なっている際の話者の言語行動について分析した。
重なりが生じた要因として、「先行発話への助け船」「先行発話への補足」と「先
行発話を踏まえる新たな展開」の三つの要因が挙げられる。そのうち、「助け
舟の発話」と「補足的な発話」によって前話者の発話が中断されることがあ
るが、その後、前話者は中断された発話を継続すると同時に、それらの発話をき
っかけに新たな展開を図ることもある。それに対し、次話者による「新たな展開」
のような割り込み発話によって前話者の発話が中断され、それをきっかけとし
て、次話者がturnを取って話し続けることができる。

5. 4 重なり時点における先行発話の形式

SSJ (1974) は「turn構成単位の最初の『移行適切箇所 (TRP)』において、
話者交替が行われている」と指摘しているが、実際の会話において、次話者は、
前話者の発話の構成によってどこで話し始めるのかを判断しながら発話権を取
る。

本節では発話の重なり時点において、先行発話（前話者による発話）の言
語的な形式を分析して、話者交替におけるturn移行の適切箇所 (TRP) はどの
ように次話者によって認識されるのを考察する。

(1)発話の産出順序（発話主幹部と補足部の産出順序）

例10：

→1SS：それ（ ϕ 着物）は日本から持ってたの [前もって

→2NA： [そうそうです、そうです

3SS：ああ：

4NA：日本から持って行って

（「 ϕ 」は発話における省略する部分）

1行目でSSは「それ（ ϕ 着物）は日本から持ってたの」とNAに質問してい
る。しかし、その質問文の後ろにSSは「前もって」と発話を補足している。
この二つの部分をまとめると「それは前もって日本から持ってたの」と解釈す
ることができる。つまり、前話者SSが発話を構築する際に発話の中核的な意

味を表す主幹部「それ（着物）は日本から持ってたの」を先に産出し、続いて補足的な部分「前もって」を産出している。次話者NAは主幹部「それ（着物）は日本から持ってたの」が現れた時点において、SSの発話内容についてすでに理解しているため、答え始めている。それによって、NAからの答えの発話とSSからの補足的な発話が重なっていることが見られた。

(2)非終止形式的な発話

例11：

1SS：じゃ完全に中国の男性が女性立ててこう

2KS：な地域にもよるみたいんですけど

→3SS：あ上海の人はその：ジェント [ルマンが多い

→4KS： [そーなんかーなん

5SS：うん

6KS：きー北、その南のほうの人はそうらしいんですよ。北はわりと男が強
いって聞いたことがあるんですけど

1行目でSSは「じゃ完全に中国の男性が女性立ててこう」というまとめの発話を構築し、それに対し、2行目KSは「な地域にもよるみたいんですけど」と1行目SSの話を補足している。KSの発話の最後に「けど」という言いさし表現を用いている。「けど」の後の具体的な内容がまだ産出されていないうちに、3行目でSSは2行目KSの発話に基づき、「上海の人はそのジェントルマンが多い」とKSに確認している。その話が産出される途中で4行目でKSは割り込んで、2行目の「けど」に続いて発話を構築しようとしている。それによって、SSの発話とKSの発話が重なっている。その後、6行目でKSは発話を修正し、再開している。6行目KSの発話の内容は3行目SSからの確認への返答であると同時に、2行目の言いさし部分の継続でもある。例11のように、前話者が発話を構築する際に、発話の意味がすでに明瞭になっているところで、次話者は前話者の話がすでに終了したと判断し、自分の話を始めている。一方、前話者は「けど」のような非終止形式的な言語形式を用いることによって、言いさし部分について話し続けたいことを示している。このようなことは次話者に理解されず、前話者が話し続けているところで発話に割り込まれ、相互の発話の重なりが生じたと考えられる。

(3)ディスコースマーカー「そんな」

例12：

1SS：あっ、そう、そうか.自己主張してないのかね、あれね

2NA：huhuh

→3NY：なんかそんな気 [がする。

→4NA : [控え目]

5SS : ああ控え目

6NY : 控え目

1行目SSの「自己主張していない」というまとめの意見に対し、3行目NYは「なんかそんな気がする」と1SSの発話を肯定している。NYは「なんかそんな気がする」と肯定的な言葉を述べるだけでなく「そんな」という指示詞を使って発話を構築している。「そんな」という指示詞を用いることによって、NYはSSの「自己主張」という発話を指示しながら1行目SSの発話をまとめている。NYの発話の「そんな気」が産出された後で、4行目でNAが割り込んで「控え目」とNYの発話に言い換えている。このように、4行目NAによる「控え目」という割り込み発話が現れた位置は3行目NYによる「そんな気」という発話の直後である。「そんな」という指示詞の前方指示の役割によって、4行目NAによる割り込み発話は3行目NYの発話についての言い換えであると同時に、1行目SSによる「自己主張しない」という発話についてのまとめでもあると考えられる。

(4) フィラー「なんか」の使用

例13 :

1KS : なんか日本が一番、自分が日本人だから分からないですけど

2SS : うん

→3KS : 一番料理がおいしいと思いました。なんか [パンとかケーキとか

→4SS : [日本ーにー俺ー日本の中
華とさ、向こうの中華ってやっぱり同じ感じなの？

1行目と3行目でKSは「日本が一番料理がおいしい」という意見を構築している。3行目の発話の最後は「なんか」を使って具体例（パンとかケーキとか）を提起している。しかし、KSが「なんか」という言葉を産出した時点において4行目でSSは割り込んで、新たな話題について述べて始めている。このように3行目でKSは「なんか」を用いることによって、具体例を使って会話を展開すると同時に、自分の「発話権を保持²」することを示している。つまり、KSは「なんか」を用いたことによって、次に発言すること（なぜ日本料理が一番おいしいと思う理由（具体例）が頭の中でまだ準備できていなく、発話権を保持し、次の言葉を準備する時間を作り出していることを聞き手たちに示している。しかし、割り込み話者SSにとっては「なんか」の前のKSの発話の意味（日本が一番料理がおいしい）はすでに完結性を持っており、「なんか」の役割は具体例でその意味を説明する³と理解して「なんか」の直後に発話を割り込んで自分の発話を導入し、二人の発話が重なっている。

以上のように、発話の重なりが生じた時点における先行発話の形式を考察した。そのうち、前話者が主幹部と補足部の産出順序、非終止形的な発話、ディスプレイマーカー、フィラー等を使用することによって次話者が前話者の発話に割り込んで、二人の発話が重なりやすくなることが分かった。

6. 重なりの後の会話の展開

Schegloff (2000) では「発話の途中で現れた発話の重なりによって、話者の発話が分裂されている。重なりが現れると、話者は次のturnを再開する際に、常に自分の発話を修正する（筆者訳）」と指摘している。串田 (2005) では、オーバーラップが現れた後に、話者が自分の発話を調整する手段として「再生」と「継続」が挙げられると述べている。本研究では、会話において、発話の重なりが現れた後に、話を中断された話者が重なりの後に、またturnを取って中断された発話を続け、あるいは自分とオーバーラップした話者の発話から影響を受け、話題を変更することが観察された。また、重なりが終了後に第三話者の参与によって会話が違う方向に展開することもある。どうしてこのようなことが見られるのだろうか、本節では発話の重なりの後の会話展開において会話参加者の相互行為を考察する。

(1)二人の話者による調整の場合

話の再生と継続

例14：

1NY：ちょうどその後、そのとき：に（.）きゅうりの炒めたものが出て（h）
き（h）て（h）

→2KS：あ、あり [ますあります

→3NY： [で、びー]

→4NY：＝びっくりしてますよね。最初えきゅー [きゅうり

→5KS： [トマトの炒めたもの [とか
も

→6NY：

[あそ

う

7NY：でもトマトはなんとなく、あのウイタリアンとかでも

8KS：う：ん

9NY：入ってるから

10KS : そうですね

11NY : あれなんですけど、きゅうりの炒めたもので、日本でなかなかお目にか(h)か(h)ら(h)な(h)い(h)と(h)思(h)う(h)よ(h)ね(h)

1行目NYの「きゅうりの炒めたものが出てきて」という発話に対し2行目でKSは「ありますあります」繰り返しながら積極的に自分の共感を示している。3行目NYはKSの話の途中でディスコースマーカー「で」を使って発話を挿入し、1行目の発話についてさらに展開しようとしているところで、その発話が2行目KSの発話と重なって、中断されている。2行目KSの発話が言い終わった後に4行目でNYはまたturnを取って3行目中断された発話（「で、び」）を継続（「びっくりしてますよね」）しながら新しい展開（「最初えきゅうり」）を図ろうとしている。4行目NYの発話の途中でKSは5行目でまた割り込んで「トマトの炒めたものとかも」と補足している。それによって、NYの話が中断された。その後NYは6行目でKSの発話の途中でまず「あそう」とKSの発話に肯定し、それからKSの発話を受け止め、新しい意見（「でもトマトはなんとなく、あのうイタリアンとかでも」）を構築し始めている（6行目－9行目）。その後、11行目でNYは「あれなんですけど」という表現を使って、その後「あれ」について新たな展開を始めている。その「あれ」についての展開（「きゅうりの炒めもので日本でなかなかお目にかからないと思うよね」）は4行目で中断された「最初えきゅーきゅうり」という話の継続であると見なすことができる。このように、NYは発話を構築する途中で、KSからの割り込みによって発話が中断されたが、その後、NYはKSの発話に割り込んで、KS発話を受け止めてから自分の中断された発話を継続し完成しつつある調整行動が見られた。

競争的に各自の発話の継続

例15 :

1KS : =なんかその : へんな

2SS : うん

3KS : 香辛料かな [そうですね]

4NY : [あそうそう]

5KS : たぶん胡椒とか五香とか

→6NA : 五香は(.)なん [ですかね]

7KS : [五香なんですけど。そうそうそうそれがなんか日

本の中華だと

8SS : うん

→9KS : すースパイス [とか]

- 10NA : [そういうの入って [ないから
 →11KS : [そんなにはいってないから、食べ
 やすい [けど
 →12NA : [もっとやーやさしい中華料理 [みたいなhuhuh
 13SS : ああ日本人の口に合う中華になってる

(φの部分では会話における省略された内容である)

1行目～5行目でKSは「中華料理には胡椒と五香などの変な香辛料が入っている」という話を構築している。それに対し、6行目NAはまず「五香は」と取り立て話を構築し始めている。それに対し、7行目と9行目でKSは6行目NAの「五香」という言葉を受け止めて展開し始めている。その発話途中でNAは発話を割り込み、9行目KSの発話（「日本料理だとスパイスとか」）を踏まえ、指示詞「そういう」を用い、9行目KSの発話について展開しようとしている（10行目）。その後、KSは11行目でNAの発話に割り込んで9行目での発話を継続している（「スパイスとかそんなにはいってないから、食べやすい」）。それに対し、12行目でNAはまたKSの発話に割り込んで10行目での発話を継続している（「そういうの入ってないからもっと優しい中華料理みたいな」）。そのように7行～12行において、NAもKSも自分の発話を遂行するために、相互にturnに割り込んで、自分の発話を継続しつつあるという会話の連鎖が見られた。二人の発話が重なった後に、KSもNAも相互の発話を踏まえて各自の発話を構築し続けていることも見られた。

例14と例15のように、重なりが現れた後に、発話が中断された話者がturnを取って発話を継続する場合と話者二人が競争的にturnを取って発話に割り込み合い、相互の発話に基づいて共同的に一つの発話を構築する場合がある。

(2)第三話者が参与する場合

一時的な参与

例16 :

- 1KS : でも日本じゃ本当謙虚ですよ。そういうとこ (φ信号無視) で
 [えってだから
 →2NA : [そうなんか
 3SS : ああ : =
 4KS : =ぜんぜん [
 →5NA : [いつまで立っても [渡れないhuhuhuhuh
 →6NY : [渡れないhuhuh
 →7NY : 渡れない [渡れない
 →8KS : [渡れないし↓

9SS：うん

10KS：そう切符とかも並んでるじゃないですか

11SS：ああ

12KS：どんどんって重ねて最初まったく買えなくて泣きそうになって

1行目KSは発話を展開しようとする際にNAは割り込んであいづち(そう)をうった後で「なんか」を使い、turnを取ろうとしている⁴。しかし、重なりが終了した時点においてKSは接続助詞「だから」を使って、4行目で「だから」の後の結果を構築し続けようとしている(「だから、ぜんぜん」)。その途中、NAは5行目で割り込んで2行目中断された「なんか」という発話を継続している(「なんかいつまで立っても渡れない」)。それによってKSの発話(4行目「ぜんぜん」)が中断されている。NAが意見を述べている途中で(5行目)第三話者であるNYは発話に割り込み、NAとともに「いつまで立っても渡れない」という発話(6行目)を完成している。その後、NYが再び重なるの発話を繰り返している(7行目)。その途中でKSは8行目で発話に割り込んで、「渡れない」とNYの発話を繰り返し、NYとともに同じ発話を産出している。ただし、KSの発話の末尾のところで音量を上げている。それによって、KSはほかの会話参加者に自分の発話がまだ終わっていないことを示している。その後、KSは10行目と12行目でturnを保持しながら、NAとNYの話を踏まえ新しい展開を図っている。そのように、1行目から5行目KSとNAは発話の重なりと割り込みを通じ、競い合って発話権が取ろうとしている。その競い合いは6行目第三話者NYの割り込みによって中断されている。その後KSはNYによる一時的な参与での発話をきっかけにして再びturnを取って会話を新たな方向へ導きだしている。

第三話者が主導権の取得

例17：

1SS：(φ中国の)水がいわゆる：日本、のように蛇口をひねって飲めないでしょう

2KS：飲めない。飲めないし、あのう髪の毛とか洗うのすら躊躇するぐらい

3NY：あの泡立ち悪いよね

→4NY：[石(h) 鱈(h)を(h) huhuhuhuh

→5KS：[(錆がある) 水出たりとか、してたん [ですよ

→6NA： [変なにおい、変なにおいが
してますよね

7KS：変なにおい

8NA：上海はね、においがだめで、もうお風呂入ってから気持ちが悪くな

る [ぐらい

→9SS: [あっ水ににおいがあるわけ？

10KS: あります

11SS: はあ: :

12NA: なんかえっこれは水? かみたいな

13NY: うん

14NA: 災害にあってるかもうなんか

1行目SSの「中国の水が日本のように蛇口をひねって飲めないでしょう」という質問に対し2行目と3行目でKSとNYは各自の感想を述べている。二人がさらに各自の発話を展開しようとする際に、発話はオーバーラップしている(4行目と5行目)。その後、5行目KSの発話の末尾のところで第三者のNAは割り込んで(6行目)自分の意見(「変なにおい…」)を述べ始めている。その後7行目KSの繰り返しの発話および9行目SSの確認的な発話によって、第三話者のNAは自分の意見を展開しつつあり、徐々に発話の主導権(イニシアチブ)を握るようになっていく。(8行目、12行目、14行目)。このように、第三話者のNAは割り込み(6行目)によって、発話が重なっているKSとNYからturnを取って、その後、NAは徐々に会話の主導権を握って、会話の展開を始めている。

例16と例17は最初の重なりが現れた後に、第一話者と第二話者が調整している途中で、第三者が発話に割り込んで参与する例である。その第三話者の参与は一時的な参与と徐々に発話の主導権を握るようになる参与に分けている。しかし、いずれにしても、第三者の参与によって、第一話者と第二話者が各自の発話を調整すると同時に、第三話者の参与により、会話全体が新たな展開があることが見られた。

7. 考察

本研究では発話の重なり位置、重なり要因及び重なり後の再開についての分析を通じ、次のことが分かった。

発話の重なり位置については、重なりが始まった時点において、産出された先行発話の意味の完結性によって「意味が明瞭になっていない場所での重なり」と「意味が明瞭になっている場所での重なり」に分けられる。その要因について、会話参加者が話者交替のルールに従い、「先行話者の発話の最初に現れた完結可能なところ」(Schegloff, 2000: 43, 筆者訳)で、自己選択による

turnを取って話し始めることがあるため、二人の次話者の発話が冒頭から重なる場合と、前話者の発話の継続と次話者の開始と重なる場合とがある。また、次話者にとって、「先行話者の発話の最初に現れた完結可能なところ」について言語形式より、意味的な完結性を優先する傾向が見られた。

また、前話者が発話を構築する途中で、次話者が割り込む位置について、先行発話の途中の言いよどみ、マイクロポーズが現れたところが挙げられる。つまり、次の話者が時間を埋めるために前話者にヒントを示したり、新たな話題を始めたりすることによって、二人の発話が重なることになった。前話者が発話を構築する際に用いた「発話文の産出順序」「非終止形」「指示詞」「フィラー(なんか)」などのような言語的なりソースは、前話者の意思と次話者の読み取り方とのずれがあることによって、発話の重なりが生じた要因でもあると考えられる。

重なり終了後の会話の展開の特徴については、二人での調整場面において、発話の途中で重なりが現れると、話者が発話を一時的に中断し、その後継続するパターンと発話が重なった二人の話者が競争的にturnを取って各自の発話を継続することによって共同的に一つの発話を構築するというパターンがある。また、最初に発話が重なった第一話者と第二話者が発話を調整する間、第三話者が割り込むことによって会話に参加する場合において、複数の話者は競い合ってturnを取って自分の発話を遂行すると同時に、その第三話者の発話により、会話全体を新たな展開になることもある。

8. 今後の課題

本研究は日本語母語話者4人の会話データをもとに、発話の重なり形成要因及び重なり終了後の会話の展開について考察した。しかし、発話の重なりという現象に基づき、turnの構成にはどのような要素があるのか、どこから話し始めればいいのかという問題について深く触れていない。これは今後の課題とする。今後多くの会話資料を収集し、そこから現れた発話の重なりから、turnの構成及びturn移行の適切な場所についてさらに検討し、また、異なった発話行為を遂行する際の発話の重なりの特徴についても考察していきたい。

注

1. 英語の訳文は木暮（2001）を参照したものである。
2. 鈴木（2000）では、「なんか」の談話調整機能の一つとして「発話権を確保したり維持したりする機能が認められた。これは、田窪・金水（1997）も指摘しているように、言いたいことが頭に浮かんでいるにもかかわらず適切な言葉がすぐに出てこないときなどにみられる、つなぎの言葉（filler）としての機能である」と指摘されている。
3. 森田（1980）では、連語代名詞「なんか」の役割の一つは不定の物事あるいは未知の物事を表すと指摘している。
4. 鈴木（2000）では「なんか」の語用論的な役割として「新たに発話権を獲得する前置き」と指摘している。

参考文献

- 生駒幸子（1996）「日常会話におけるは発話の重なる機能」『世界の日本語教育』6，国際交流基金日本語国際センター，185-199
- 木暮律子（2002）「母語場面と接触場面の会話における話者交替—話者交替をめぐる概念の整理と発話権の取得—」『言葉と文化』3，名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻，163-180
- 鈴木佳奈（2000）「会話における「なんか」の機能に関する一考察」『大阪大学言語文化学』(9)，63-78
- 藤井桂子・大塚純子（1994）「会話における発話の重なり—協力的側面を中心に」『言語文化と日本語教育』6，お茶の水女子大学日本語文化学研究会，1-13
- 藤井桂子（1995）「発話の重なりについて—分類の試み—」『言語文化と日本語教育』10，お茶の水女子大学日本語文化学研究会，13-23
- 町田佳世子（2002）「初対面の会話における発話の重なる効果」『北海道東海大学紀要・人文社会科学系』15，189-210
- 森田良行（1980）『基礎日本語』角川書店
- Sacks, H., Schegloff, E. A. & Jefferson, G. (1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation, *Language*, 50(4), 696-735.
- Schegloff, E. A. (1996) Turn organization: One intersection of grammar and Interaction,

In E. Ochs, E. A. Schegloff, & S. A. Thompson (Eds.), *Interaction and grammar*, Cambridge : Cambridge University Press, 52 – 134..

Schegloff, E. A. (2000) Overlapping talk and the organization of turn-taking for conversation, *Language in Society* 29, 1 – 63.